

# 人情零れ話・恋愛零れ話

## 入選者決定!!

- 選考委員
- ・常田 富士男氏 俳優
  - ・新井 満 氏 作家
  - ・泉 椿魚 氏 戯遊詩人
  - ・山口 幹文 氏 鼓舞舞台顧問



前列左から 泉椿魚さん(審査員)、常田富士男さん(審査員)、福島千佳さん(恋愛零れ話大賞)、高野宏一郎市長、田上幸子さん(人情零れ話大賞)、奥山真理さん(新潟県知事賞)、新井満さん(審査員)、山口幹文さん(審査員)後列左から 鈴木睦美さん(新潟県酒造組合佐渡支部賞)、小林節子さん(佐渡汽船賞)、広瀬美代子さん(柏崎市長賞(恋愛)),津田裕子さん(柏崎市長賞(人情)),川端典子さん(佐渡市長賞)、金原道純さん(金原茂久さん代理出席、佐渡連合商工会長賞)、木村留美子さん(新潟交通佐渡賞)、河合夏美さん、沼澤有咲さん(特別賞)

思いやりやなさをテーマにした「第3回佐渡情話人情零れ話・恋愛零れ話」入選発表セレモニーが、11月11日(金)午後5時から、小木あゆみ会館にて行われました。受賞式には15組のうち、大賞を受賞した2名を含む、11組から出席いただきました。審査にあたった俳優の常田富士男さんからは「まんが日本昔ばなし」を思わせる語り口で大賞2作品を、鼓童の山口幹文さんの篠笛をバックに朗読いただきました。また、新井満さんからは「この街で」という詩朗読、歌唱。泉椿魚さんからは選考過程のお話などもありました。

この寄稿文募集は、回を重ねるごとに多くなり、今回は1501通もの作品が集まりました。3年間の募集により既に4332通に及ぶ人情、恋愛話が集まっています。今後は各種のメディアやツールを駆使してこれらの作品を世に送り出して行く予定です。これからも佐渡島



特別賞を受賞した山形県舟形中学校

が「人情の島」、人にやさしい島として認識され、多くの人々をひきつけてやまない島になればと思います。

受賞作品は、ホームページで公開されています。http://sadojiyouwa.com/

部門	タイトル	受賞者
人情零れ話大賞(人情)	「けんかの理由」	田上 幸子 北海道札幌市
恋愛零れ話大賞(恋愛)	「思い出旅行」	福島 千佳 奈良県桜井市
新潟県知事賞(人情)	「送り主のない贈り物」	奥山 真理 京都府京都市
佐渡市長賞(恋愛)	「都会娘から田舎娘へ」	川端 典子 新潟県佐渡市
新潟県観光協会賞(恋愛)	「亡夫へのラブレター」	五日市美智子 岩手県二戸市
柏崎市長賞(人情)	「出会えてよかった」	津田 裕子 栃木県小山市
柏崎市長賞(恋愛)	「恋することって罪ですか」	広瀬 美代子 大阪府寝屋川市
佐渡観光協会賞(人情)	「返事が来たよ」	吉村 金一 佐賀県鹿島市
佐渡市教育委員長賞(人情)	「今日も走ってる」	桑原 義仁 新潟県三条市
佐渡市公民館賞(人情)	「井上さんとの夜」	山本 浩伸 大阪府北区
佐渡連合商工会賞(恋愛)	「双葉」	金原 茂久 神奈川県横浜市
佐渡汽船賞(人情)	「暖かい鼓童の皆様」	小林 節子 東京都文京区
新潟交通佐渡賞(恋愛)	「ピンクトルマリン」	木村 留美子 新潟県長岡市
新潟県酒造組合佐渡支部賞(恋愛)	「夢の中なら許してあげる」	鈴木 睦美 大阪府大阪市
特別賞(人情)	「人情零れ話119作品」	山形県舟形中学校 山形県舟形町

### 人情零れ話大賞

#### 「けんかの理由」

北海道札幌市 田上 幸子

実家の母からの電話。いつものように母は天候や御近所の話などをひとしきりした後「そうそう、このあいだ父さんとけんかしてさ」と思い出したように「そうそう」と言っけれど、ははあ、話したい事はこれか?と思いつながら受話器「耳と心を傾げると……父と母がふたりで魚市場に買い物に出かけたところから話は始まった。



その市場で、生きがいいよ。安くしてやるよ」と言われて父の好物の毛ガニを1パイ買ったという。そして家に帰って新聞紙の包みを開けてみると、なんとカニは生きがいいどころか、まだ生きていてはさみを動かしていたという。

「何か食べたんじゃないか」と父が言い、母が冷蔵庫から竹輪を取り出して小さくちぎって口元に近づけると、カニはおいしそうに母の話では「食べたという。」

台所では鍋にお湯がぐらぐら煮立っ

ていて、今か今かとカニを待っているというシチュエーション。

さて、肝心のけんかはというと……どちらがカニを鍋に入れるかということだった。

「父さんが食べたくなって買ったんだから父さんがゆでて」と言っ母と「生きたカニだとわかっていたら買わなかった」と父。要するにどちらも生きていたカニをゆでるのがいやなのだ。ふたりが言い合っ様子を想像しながら、結局どつしたの?と私ふたりは食欲旺盛な?そのカニを再び新聞紙に包むと近くの海岸まで車を走らせ、海へ返してやったという。

けんかの全容を聞き終えて、へへえ、現代版浦島太郎だね。めでたしめでたし。そのうちにカニの恩返しがあるかもね」と笑って私は電話を切った。そして、思った。愛と情けはカニを救っ……ってか。ほんとつづ、こんな両親の元に生まれた私は幸せもんです。

### 恋愛零れ話大賞

#### 「思い出旅行」

奈良県桜井市 福島 千佳



数ヶ月前のことだ。楽しみにしていた山陰旅行の前日、父が突然救急車で運ばれた。そのときにはすでに危篤状態だった。父は一時的に意識を取り戻した。医師からは、まだ危険な状態だと説明されたが、手を握り返してくれるようになった。そして父は、呼吸器をつけたまま私に手招きして、か弱い口元で「ちず」と口にした。

母にそのことを告げると、翌日には迷つことなく、島根県の地図を手にしていた。それは入院前に父がよく見ていた山陰旅行用の地図だった。父に見せると嬉しそうに何度も頷く。目の前にその地図を広げて見せると、食い入るように見つめ、時折指差しては弱々しく微笑んだ。そんなに旅行が楽しみだったのだろうか、やけに地図に執

着している父を、母は黙って見つめていた。入院から一ヶ月後、父は力尽きなくなった。葬儀では柩の中に、父の好きだったタバコや好物を入れた後、母はそつと「島根県」の地図を、冷たくなった父の胸元に置いた。そしてそれまで気丈に振る舞っていた母が、初めて涙を流した。

数日後、ようやく一息ついたときだった。母にあの地図のことを尋ねた。「実はね、お母さんたちの新婚旅行がね、島根県だったの。貧乏でなにも持たなくて、友人に軽トラを借りてね、二人で旅したの。地図だけ持ってたからお父さん、またあの場所に行きたかったのよ。」

父は、病床で、地図を見ながら何を考えていたのだろう。母との思い出を、自分なりに紐解きながら、旅していたのかも知れない。父は六十二歳で亡くなるまで、母のことを愛していたのだと改めて思った。本当に心から母を愛していたのだということ。私は、遺影の父を見て、そつと手を合わせた。父は優しい表情で笑っていた。

